

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】(2ユニット/1階ユニット)

事業所番号	2773801291		
法人名	医療法人 健泉会		
事業所名	グループホーム西松庵		
所在地	大阪府羽曳野市高鷲7-82		
自己評価作成日	令和4年7月15日	評価結果市町村受理日	令和4年9月12日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当法人の理念として「あなたに寄り添い 尊厳を守り あなたらしさを発揮できる そんな生活を実現します」を職員間で毎日唱和し、私たちが利用者様の気持ちに寄り添い、これまでの利用者の生きてきた歴史や、大切にしてきた思いを尊重できるよう最後まで自分らしく生活して頂くよう努めている。四季折々の食事と地域性を生かした交流には積極的に参加。お家族様と一緒に過ごす大切な時間もお手伝いし、昼間は楽しく活動的に、夜間は安心して休んで頂くという当たり前の日常生活を過ごしていただけるよう心がけている。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ニッポン・アクティブライフ・クラブ ナルク福祉調査センター		
所在地	大阪市中央区常盤町2-1-8 FGビル大阪 4階		
訪問調査日	令和4年8月15日		

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所としての目標は、日々笑顔で利用者に関わっていくである。目標を具現化するためには、何が最も重要かを常に念頭に置き活動している。利用者家族も深く事業所の運営に関わっている。家族会があり、運営推進会議に出席し、家族の意見として提案したり利用者の代弁もする。外気に触れる機会を作って欲しい、という利用者や家族の要望に、中庭の広い庭園に利用者全員が憩える鋳物の庭園セットを家族会が寄贈し応えている。食べる事へのこだわりも持っている。管理栄養士がメニューを作り、事業所でアレンジして提供している。季節の大和野菜や奈良米を取り入れ、味付けはだし汁で加減している。実に美味しい、利用者の笑顔がこぼれるのも頷ける。居室の入り口には、粋な暖簾が飾られている。各利用者の名前が(書道家の理事長夫人直筆)が書かれ分りやすくデザインも素晴らしい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人理念の読み上げは継続して、入居者様の前で毎朝唱和している。「あなたに寄り添い、尊厳を守り、あなたらしさを発揮できるそんな生活を実現します」と定め、個々職員の現場に入る準備点検の場になっている。	法人の理念の他に、事業所独自の目標「優しく笑顔で関わっていきましょう。」を掲げている。管理者や職員は、毎朝朝礼で確認したうえで日々のサービスに入っている。利用者へのサービスのあり方について、目標を具現化するためには、何が最も重要かを常に念頭に置き活動している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に加入し、地域行事の盆踊り、芋煮会、菊花展などはコロナ禍で減少。参加できるイベントにはお誘いがあれば、出向くようにしている。オレンジカフェなどのイベントも開催できておらず、外部のボランティア、デイサービス主催の音楽イベントも参加を2年中止している。	コロナ禍以前は、地域を散歩して近隣の方々と挨拶を交わしたり、オレンジカフェへ出向いて行って地域の高齢者と交流をしていた。また、併設のデイサービスに通ってくる高齢者住民と共に、書道教室や音楽教室、その他レクリエーションを楽しんでいた。それも、2年ほど途絶えている。コロナが落ち着き次第、再開する。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	当法人でのオレンジカフェを月1回開催し、介護相談や事業所見学などの対応を行っている。現在はコロナ感染予防対策にて開催延期。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	偶数月の最終木曜日を開催日と予定し、行政からは高年介護課、地域からは老人クラブ会長、ホームからは利用者様の家族及び、法人代表や管理者と計画作成担当者が出席。ホームの現状報告と第三者からの質疑応答等、意見交換を行っている。	運営推進会議はコロナ禍であるにも関わらず、偶数月の最終木曜日を開催日と設定し定期的に行われている。メンバーは、利用者家族、老人会会長、市役所担当職員、事業所職員等で、事業所の状況や活動内容、ヒヤリハット等を報告し意見を交わし合っている。市担当職員の助言や家族の意見要望などが、事業所のサービスの向上に活かされている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	コロナ禍での現状を地域包括支援センターや、指導監査室など相談事については助言を頂き、解決する努力をしている。発信された情報は職員間で共有を行っている。グループホーム部会は休止しているが気になった情報は直接連絡を取り合うようにしている。	市役所の高年介護課や福祉指導監査課の担当職員とは、運営推進会議に参加して貰い、ヒヤリハット事故報告書について助言や指導を受けたり、介護保険の改正事項の指導も受けている。指導内容は職員全員で共有するようになっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人にて立ち上げてた「身体拘束適正化検討委員会」にて他事業所の現状を報告。年2回身体拘束に関する研修をホーム内にて実施。その内容も運営推進会議にて報告。法人の運営会議で虐待防止委員会を開催し報告している。問題提起あれば再度身体拘束適正化会議にて話し合いを行っている。	身体拘束等適正化委員会を3ヶ月に1度、委員会の構成員を定め定期的に開催している。また、適正化のための指針は法人で作成し、職員が理解し易いように基本方針、やむを得ず拘束する場合の対応等を解説している。玄関は、車の往来が多くやむを得ず施錠しているが、広い中庭は開放されていて、全く閉塞感はない。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	日頃の介護現場で計画作成者や看護師の意見の下、転倒、事故の対策方法について意見をもらい、その方法論から虐待・身体拘束などに相当しないか客観的な判断を求めつつ、検証を行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	地域包括支援センターや社会福祉協議会の社会福祉士や権利擁護担当者に不明な点については質問を行っている。職員にて研修機関主催の研修に関しては積極的に参加し情報の共有をしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	施設の概要を説明する際は、施設見学を勧め、家族様には事前に不安に関する質問に対して回答を行っている。また契約時の説明時も家族様が納得いくまで時間をかけ、分かりやすく説明し、意向確認での解約可能である説明も含め納得頂いている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	年に1回の家族総会はコロナ禍で2年間、開催を見合わせている。運営に関してホームから経営的な内容、家族側からのサービスの内容に関して、話し合いが行われていないのが現状で問題点の解決に時間がかかったり、家族様からの意向が汲み取りにくい状況となっている。	利用者や家族の意見に、家族会が協力してくれている。コロナ禍で少しでも外気に触れる機会を作って欲しい、という利用者や家族の要望に、中庭の広い庭園に利用者全員が憩える鑄物の庭園セットを家族会が寄贈し応えている。事業所と家族会が一体になって運営に関わっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	現場での問題点や意見に関しては、グループ会議を開催する前に個々で聞き取りを行っている。早急に解決しなければならない案件から話し合い、解決できなかった内容に関して、次月会議にて持ち越し議案としている。管理者発信でなく、現場で働くスタッフが問題意識を反映しやすい環境づくりに努めている。	管理者は、普段から出来る限り職員の意見を聞く機会を作っている。意見の殆どは利用者の体調面や介護に関する事の提案である。オムツ交換に関する事、ポーターブルの使用等、不足していると感じている事を、普段から聞き出し書き留め運営に反映させるように環境づくりに努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人として介護福祉士、介護支援専門員等の資格取得者に対する報酬制度を設けられており、管理者は職員に対し資格取得を促している。また管理者は随時、職員との面談を行い、日頃の勤務態度について指導助言を行い、これらの内容は随時代表者に報告を行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	事業所内会議においてテーマを持って各職員が担当制にて、毎月内部研修及び外部研修の伝達研修を行っている。法人主催の外部から講師を招いての研修会は管理者が勤務調整可能な限り参加を促し、報告書と次はどんなテーマの研修が希望なのか要望書の提出も行っている。現在はウェブ研修、災害体験研修を行う。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム各事業所「計画作成者の集い」は2年間定期開催を見送りとなっている。また2カ月に1回開催する部会にて関してはこの8月末に感染状況を鑑みて、2年ぶりの開催を予定。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	家族様の不安や要望にまず納得がいくまで事前に話し合いを進めて、契約時も含め安心して預けて頂けるよう努めている。事前に頂いた情報は職員間で共有し現場に反映できるよう新入居日から一日でも早く馴染んでお過ごし頂けるよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族様の面談にて、入居前からこれまで過ごされてきた経緯を伺いながら、今後の不安や困りこと、要望を聞きできるだけその気持ちに添えるサービスに近づけるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	家族様の意向と利用者様の今の状況からホームで生活する上で、何を優先してサービスが必要なのか考えて行っている。また試行した状況により、プランの変更も視野にいれ柔軟な対応ができるよう努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	ホーム内入居者様の高齢化も進みホームとしての意義である自立支援や日常生活動作の維持が難しくなっているのが現状変わりにない。何かケアに問題等あれば、他事業所からの意見、助言も参考にし、家族様には現状を常に把握して頂くようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族様からの提案や私たち職員の今の現状は何かのご連絡ついでにお話しさせて頂き、ご理解に努めている。現場主導にならないよう、客観的に情報を共有し不信感に繋がらないよう心掛けている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナが少し落ち着いて家族様との面会再開時、本人様の友達をお連れして頂き気分転換を試みる。まだ遠出の外出はできないが地域交流の一貫で芸能発表会など参加。地域の顔つなぎに努めている。	羽曳野市の公民館で芸能発表会があり参加をし地域の方々との交流を諮った事があるが、コロナは、その後落ち着きを見せず、現在交流は自粛している。馴染みの関係継続の支援の一つの手段として、電話やハガキ等で関係継続の支援に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	重度化、認知症の進行具合がかなり加速している現状で、日々のケアに追われてなかなか立ち止まるのが難しい日常となっている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約が終了となっても、その後電話連絡し、近況報告して頂けるよう努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	全体会議にて利用者様へのケアに、個々でどう取り組んでいるのか、問題、悩みなど、職員間で共有できるよう努めている。	一人ひとりの利用者とは、日々の関わりの中から思いや暮らし方の希望を聞き出している。書道の得意な人、家事洗濯物、洋裁が得意で丈直しのできる人、等介護計画にも取り入れて活用している。困難な利用者には生活歴を参考にしながら、日頃のかかわりの中から利用者の表情、笑顔が観られた時などを見て、思いや暮らし方の把握に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前アセスメント実施も含め、家族様や居宅担当ケアマネ等から、予め情報提供して頂いた内容が日々の生活に反映されるよう、職員間で共有しケアにつなげられるよう努めている。馴染みの物や家具、衣類、備品、嗜好品などその方の環境変化に伴うストレスの緩和に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	サービスを受ける入居者様、提供する職員側もストレスを感じない現場づくりとして、ケアの統一性や提案、家族様の助言などの情報共有は意識して行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	現状のケアプランの優先度、この方が今、一番必要とされているケアについて、事前に洗い出しを大切にしている。肉付け作業を繰り返して家族様の意向と本人様の満足度を図ることが重要と考える。	介護計画の期間は長期計画を6ヶ月短期計画を3ヶ月としている。日々の生活記録や、モニタリングにより実施状況をチェックしている。変化が起きた時にはその都度、担当者会議を開き医師・看護師の意見を聞きながら臨機応変に介護計画の見直しを行い、家族の同意を得る様にしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別記録の記載は日勤帯、夜勤帯それぞれ観察した内容を記載し、今後の課題に繋がらざるや状況を新たなサービスに反映できるよう努めている。認知症の進行に伴う行動や発言に関しては、抜粋してケアの統一化、対策検討につながる記録づくりに努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ニーズの多様化に現状追いついていないと感じる。ホームとしての特性、自立支援とサービスの一環性を展開していくのが難しい状況もあり課題が残る。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ピアノ合唱、演奏会、マジックショーなど地域でご協力頂ける方々をお招きし、ご協力頂いているがコロナ禍で参加はできていない。消防訓練は参加しているが動ける方が優先的となっている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医に関しては、入居契約時に事前に家族様の希望を聞き取りして、他の主治医を希望させられる際は、家族様付き添いをお願いしている。内科は2週間に1回、法人内のクリニック往診され、歯科、精神科等とも連携し、家族様にはお変わりあれば随時、ご連絡し経過報告している。	入所時にかかりつけ医について相談し希望を聞き取っている。年1回は特定健診を受診している。協力医療機関として理事長が主治医（内科）として月2回往診している。法人の歯科衛生士が口腔ケアを行い治療の必要があれば歯科医が訪問する。訪問看護師と24時間オンコール体制がとられ、緊急時も安心である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問看護にて常時利用者様の身体状況の把握情報の共有を行っている。クリニックなど他に往診する際、薬の変更や主治医との連携体制は継続して努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院時は看護師と連携をとっている。家族様、ご本人様の負担にならないよう、できるだけこちらサイドが動くよう心掛けしている。主治医の意見も家族様に伝え、安心して頂けるよう努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	年1回アンケートから意向調査確認を行っている。家族様の考えを優先し、選択していただけるよう配慮している。グループ会議での看取りの内部研修も行い、看取りの振り返りなど実践でどのように対応している。	「看取りに関する指針」「終末期の看取り等についての意向確認書」を入所時に説明している。意向確認書は毎年記名アンケートをとり本人と家族の意向を再確認している。今年度は1名の看取りを行った。「看取りの振り返り」研修を通じ職員のメンタル面もサポートし看取り介護のレベルアップを図っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	法人内にて災害研修を実施。内部研修時において対応の在り方について各事業所で話し合いを行った。実践時な問題や課題は残る。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	食糧備蓄の補充管理は定期的に行っている。訓練に関する避難経路として2階者の誘導はエレベーター使用で毎回行っているが、災害発生時の想定としては非現実的な状況であると認識。課題が残る。	デイサービスと合同で年2回避難訓練(消防署指導・自主訓練)を実施している。初めての試みとして、法人主催の災害後のインフラ停止に備えた訓練(マッチと新聞紙で点火・飯盒炊飯 など)に全職員が参加した。自然災害のBCP(事業継続計画)策定は本部主体で順調に進行中である。	昼間想定での訓練が2回連続している。次回は夜間想定での訓練実施を望む。災害時の地域住民や近隣(職員)の家族にも参加を要請し「避難場所での見守り」のように具体的な役割を依頼するなど、地域住民に対し応援体制の拡充への働き掛けを期待する。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個人のプライバシーに関する意識は転倒の危険性や行動把握の動きの中で表裏一体であると感じる。職員間の言葉使いや接遇面では問題があれば、指摘できるようアナウンスは継続している。	接遇マニュアルをもとに研修を行い、会議で繰返し、周知に努めている。言葉掛けには特に注意を払い、利用者を苗字で呼ぶようにしている。トイレや入浴時には扉を閉める・入室時のノック・さりげない声かけなど、プライバシーに配慮している。個人情報ファイルは施錠できる事務所で適切に保管している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	常に選択肢が生まれるケアでの声掛けに意識して、本人様の不満や不利益な状況となっても傾聴できるよう努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ご自身の生活スタイルや、過ごされる場所に関して自由に選択して頂いている。午後から少し身体を休めて頂くよう居室に戻ってお昼寝などのお声掛けはさせて頂いている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	自身の身だしなみやお化粧は随時、職員もチェックし、いつまでも他者を意識できるような環境づくりに努めている。コロナ禍で外出が自粛させて、日常着を選んで頂く工程が少なくなったと感じる。今後は少しずつ回数を増やして、意識していきたいと考える。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	隣接するデイサービスの食事は売りである。コロナ禍も加味してデイ側にある厨房からの運搬経路を変えている。職感染対策もあって会話しながら一緒に召し上がることができないが、利用者様は食事の内容には納得し喜ばれている。	法人が献立・こだわりの食材(大和野菜、奈良米他)調理・昼夕の配食を一括して管理している。料理を残す利用者は全くない程、食事のおいしさには定評がある。中庭やミニサロンでの趣向を変えてのお茶会や食事会・コンビニのお菓子バイキングなど楽しい企画に次々と取り組み、利用者には喜ばれている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	入居者様の嗜好に合わせて、水分補給時の飲み物の種類を、個々で替えて提供している。水分摂取量や食事摂取量に関しては著しく摂取量の変動があれば、ドクターや看護師に相談し指示の下で対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	ご自身でできる方は職員見守りの下で行ってもらうよう努めている。口腔内に何か問題があれば、その都度、歯科衛生士に状態を報告。必要であれば訪問歯科の往診依頼の対応までお願いしている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々に問題があれば決めつけず、モニタリング用紙を作成。区切りをつけてカンファレンスを実施。検討した内容を個々のケアに反映できるよう心掛けている。また、ご自身でできる一連の動作に関して職員間で見守り、統一したケアが図れるよう情報と共有に努めている。	殆どがリハビリパンツにパットを併用(常時オムツ使用1名、布パンツ1名)。夜間は4名がポータブルトイレを使用している。巡回時にパット交換やトイレに誘導するが、あくまで安眠重視とし個別の対応をとっている。細かく適切な排泄支援により、入居時や退院後のオムツ利用者の多くが改善している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便チェック表から回数、量、便質など排便状況の把握をおこなっている。問題や気付きがあれば都度、看護師に相談し対応している。掛り付けの医師に内服の処方打診する際は介護側もしっかり排便コントロール管理に努め慎重に対応している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週2回の入浴日であるが、ご本人様の希望される日、順番、ご要望があれば反映できるよう努めている。入浴実施時は事前に時間や順番をお伝えしたり、外出など当日入浴ができない場合は振替入浴して頂けるよう対応を行っている。	入浴時間は週2回、午前中を基本としているが、希望にあわせ柔軟に対応している。浴槽は家庭用で機械浴はない。浴槽をまたげない重度の利用者には二人介助や、シャワー浴で対応し清潔を保持している。職員宅からの菖蒲や、中庭の果樹園で収穫したユズを入れて、季節の香り湯を楽しんでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	コロナ禍もあって、個々の生活パターンがかなり変化している。活動範囲が狭まった影響も加味して、夜間の睡眠の質はそれに反映しているのが現状。高齢も伴いできるだけ、お昼間は居室で休んで頂くよう勧めたりベット臥床の対応を行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬剤情報の把握と管理、臨時薬の処方も介護職員同士の申し送りでも共有に努めているが、まだ課題も多い。また配薬時は氏名、朝食、昼食、夕食、日にちの読みあげを職員間で目視、確認の徹底。服薬の際、飲み込み難しと判断した際は看護師に相談のもと、錠剤を粉末に変更してもらっている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	洗濯物たたんで、食器、お盆の拭き上げ、献立表の記載、見守りで縫製、野菜などの皮むきなど、個々の性格や生活習慣を活かしたお手伝いを日々の日課に取り入れ貢献している達成感を感じて頂くよう心掛けて依頼している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍での社会情勢に合わせて少人数であるが、個別で外出を行っている。重度の方に関しても外の空気を味わって頂きたいと、裏庭に出て頂き、お茶やお菓子を召し上がって頂けるよう努めている。	コロナが落ち着いた期間は地域の家庭に招かれ、あじさいの花見や地域のイベントを見学したりと感染対策の上、近くの外出は続けている。ガーデンセットのある果樹園(柿・ミカン・イチジク・柚他)の中庭は十分に広く、気軽に毎日の日光浴が出来る。コロナが収束し家族も含め遠出が出来る日を待ち望んでいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理が難しくなっている中、帰宅のご要望時のお金の催促、支払いたいと要望される方に関しても、事務所で管理させて頂いているとしっかり説明し、納得して頂けるよう努めている。また所持しないと不安という利用者様には家族様をお願いして財布をもったり柔軟に対応できるよう考えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	不安と訴える利用者様には個別で家族様との電話、手紙の受け渡しなど行い、繋がっているという実感を感じて頂くよう心掛けている。ホーム宛てに届くお手紙は本人様に手渡しし、開封、代読させて頂いている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	裏庭からの果樹園や菜園ではみかん、柚子、ブルーベリー等が実り、初夏はバーベキュー、春は八重桜を見ながらお茶をするのが恒例となっている。2階のEVホール前にミニテーブルを置き観葉植物を飾って、談笑できるスペースを作成。少しでも気分転換をできるよう工夫する。	共有部は広々とし職員の間が行き届く中、利用者はマスクを着用し新聞や百人一首などを楽しみ、思いおもいに穏やかに過ごしている。障子や畳コーナーがあるなど、和風で統一されている。壁面はすっきりとし職員との共同作品が飾られ、季節が感じられる。色々な果樹が植わった広い裏庭は、外気浴に多用されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	情緒が不安であったり、その方の体調に合わせて居室に誘導させて頂いている。行動把握の必要性が高い方や、介助抵抗やこちらの意向が通らない方に関しては、ご自身のペースで過ごしていただけるよう配慮に努めている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居宅で住まわれていた際の、馴染みのある家具や自宅で使い慣れた思い入れのある写真、壁掛け、茶器など持参して頂いている。家族様と相談してヒントも頂いたり、可能な限り心地よく生活して頂けるよう説明に努めている。居室内での転倒に関しては環境整備の上、安全面を配慮したレイアウトを実施。	障子の窓から柔らかい光が差し込み、入り口の暖簾には各利用者の名前が(書道家の理事長夫人直筆)が書かれ分りやすい。エアコン・ベッド等が設置され筆筒などを持ち込み、お気に入りの小物・家族の写真等を飾り居心地良く暮らしている。清掃は職員と一緒にする利用者もいて清潔に保たれている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	表札代わりとなるご自身の名前の入った染付の暖簾で自身の居室であることを自覚して頂いている。共用スペースにも分かりやすく大きくイラストで提示させて頂き、目的に沿って不自由なく行動できる環境づくりを心掛けている。		